

B-2-68 当院における VAP 症例の検討—VAP による死亡率は本当に高いか？

帝京大学医学部附属市原病院 救急集中治療センター¹、
帝京大学医学部附属市原病院 看護部²

長谷洋和¹、藤田正人¹、富永洋介¹、宇野幸彦¹、福家伸夫¹、平野充²、
力武涼子²、奥田真弓²

はじめに

院内肺炎の中でも人工呼吸器関連肺炎（以下 VAP）は致死率が高く 20-70% に及ぶとされている。しかし死因が VAP 自体によるものなのか、基礎疾患や合併症によるものかの判断は実際には難しく、また本邦における VAP 死亡率の報告は少ない。そこで当院の VAP に関して発症率、起因菌、死因、使用抗生剤について検討した。

対象と方法

対象期間： 2003 年 1 月 1 日から 10 月 31 日

対象： 当院 ICU にて人工呼吸器管理した 250 例

調査項目： VAP 発症率、死因、VAP 起因菌、使用抗生剤

肺炎判定方法： 米国内感染サーベイランス（以下 NNIS）の 2002 年版肺炎判定基準

結果

当院 ICU において 250 例の人工呼吸器患者のうち VAP 発症は 6 例で発症率は 6.45 であった。これは 2002 年 1 月から 2003 年 6 月の NNIS の統計では 4.9 であり同程度であった。

VAP 患者の全体の死亡率は 33% であ

ったが肺炎そのものが死因ではなかった。

VAP の起因菌は早期 VAP では 2 例で緑膿菌単独 1 例、緑膿菌とモルガネラが 1 例。晚期 VAP は 4 例で緑膿菌単独 2 例、MRSA 単独 1 例、緑膿菌とモルガネラが 1 例。早期・晚期に関わらず緑膿菌が多かった。

使用抗生剤は VAP 発症前にはアンピシリンスルバクタム合剤、セファゾリンが多く使われていた。VAP 発症後はシプロフロキサシン、アルベカシン、イミペネムシラスタチン合剤が使用されていた。

考察

VAP 発症率は NNIS の結果と同程度であった。半年間の調査では肺炎を直接死因とする VAP 症例はいなかった。これらは VAP 発症後の対応、治療が適切であったと考えられる。

当院においては早期 VAP でも、本来は晚期 VAP の主要起因菌である緑膿菌が多く検出された。緑膿菌を中心とした、感染対策の見直しが必要であり、問題点を抽出、明確化し感染予防策を見直ししていくことが重要である。